

## 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

活字離れが指摘されて久しい昨今ですが、  
難解とされているロシアの文豪ドストエフスキーの  
『カラマーゾフの兄弟』（全5巻）がベストセラーになっています。

翻訳者は東京外国語大学長の亀山郁夫氏。  
文学者であり、大学の経営者でもある亀山氏に、  
古典を学ぶ意味から大学のあり方まで語ってもらいます。







日本のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

成熟した人間の必須条件——それは教養だ。  
教養こそがグローバルというつぼの中で  
多様な価値観や現象の奥底を理解する最大の武器！

ロシア文学者であり、東京外国語大学長でもある  
亀山郁夫氏をお迎えしたのは、  
ロシア民俗学を専門とする坂内徳明前副学長。  
話題の『カラマーゾフの兄弟』の話を皮切りに、  
ロシア文学から教養論まで話が及びました。  
そこから、人間を知り、  
物事の根底を洞察する力を身につけるための古典を学ぶ  
教養教育の重要性が見えてきました。  
そして、「全方向的コミュニケーションの道具」として、  
21世紀に通用する「教養」を再構築する必要性も。

東京外国語大学長

# 亀山郁夫氏

一橋大学前副学長

VS

# 坂内徳明





## 現代に通じるアクチュアルな問題を 浮き彫りにするのが古典だ

**坂内** 東京外国語大学の亀山郁夫学長をお招きしました。亀山先生の翻訳されたドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』は、大変なベストセラーになっています。いまは『罪と罰』の翻訳に取りかかっておられるそうですね。

**亀山** 全3巻ですが、すでに3分の2の翻訳は終わっています。15歳のときに読んだ記憶が鮮明に残っていましたから、『カラマーゾフの兄弟』よりは翻訳がはるかに楽でした。学長の仕事をこなしながら精神面のリフレッシュを楽しんでいます。民俗学がご専門の坂内先生には1860年代のロシアの社会状況を教えていただいて感謝しています。

**坂内** 我々の学生時代は、ロシア文学や思想書などを岩波文庫で読み、あるいはそれを抱えてキャンパスを歩いたものです。30年も経つとそんな雰囲気はなくなってきたようです。時代が変わってしまったのでしょうか。

**亀山** それぞれの時代の精神と社会現象との間には当然のことながら相関関係があります。ポスト構造主義のレトリックは、加速するグローバル化の流れの中で知的な満足をもたらすものではなくなりました。あらゆる局面での二極化が示すように、ある意味で世界が原始化したからです。そこで教養の重要性が再認識されはじめたのです。

19世紀後半のロシア文学というのは、その知的なたたずまいの中にきわめて豊かなものを秘めていました。古典は、人生の根本問題を扱うレトリックであり、生命のありようを考えるものです。そこから普遍的な人間の姿を理解できるようになるのです。

しかし、1980年代になって、古典への関心が薄れてきたようです。そして1990年代に入ると、人文学系の知のレベルが急速に右下がりになってきました。その流れをどう押しとどめるか。グローバル化時代の進展をにらみながらいかに文学、社会学を豊かなものにし洗練化していくかがわたしたちの大事な課題になっています。

『カラマーゾフの兄弟』のベストセラー化はその意味でもひとつのヒントになると思いますね。この小説はまさに現代人の病を映しだしています。農奴解放後の19世紀後半のロシアと、富裕層、貧困

層の二極化が進んでいるグローバル化の現代とをみると、時代の精神性がよく似ています。つまり、少しでもその部分に思いを馳せることができれば、現代社会の根本にある何かを解ききっかけが得られると思うのです。

## 21世紀に通用する 普遍的な道具としての教養づくり

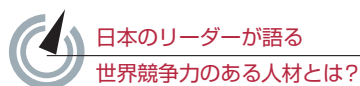
**坂内** 日本では、戦前の旧制高校・大学から受け継いだ学部学科制とアメリカ輸入のリベラルアーツが奇妙なドッキングをし、いまの教養教育体制を生み出しました。このようなシステムは、現在、大きな転換期にさしかかっています。学部教育の質＝学士力をいかに保証するのか、その際に教養教育とはいかにあるべきか、特に、人々が無限の情報を手にしてグローバルに動いている現代において、従来どおりの専門と教養の関係でよいのか、いやむしろ、教養課程+αで十分ではないか、などと、さまざまな議論がなされています。以前は軽視されていた一般教養でしたが、教養重視に変わってきました。

**亀山** かつては、専門が究極の目標であり右上がりの時代を支える知識であるのに対して、一般教養はアクセサリ知識と受け止められていました。そのころと今の時代が根本的に違うのは、世代間、同世代間のコミュニケーションのありようです。

古いかたちの教養は、すでに折り返し点に立っていたのです。普遍的な道具としての教養の組み替えが必要だったのにもかかわらず、それがまったく行われてこなかった。その結果、普遍的な道具としての教養の概念が壊れてしまいました。

現実に立ち返るべき人文学の遺産としてゲーテやシェイクスピアをやはりもう一度掘り起こす必要があります。と同時に、例えば、『ハリー・ポッター』を新しい教養としてどう提示するか、これも重要な課題です。さらに、人文、社会、自然科学の三つの領域をカバーし、総合する新たな教養の枠組を構築することも必要ですね。21世紀の現代にふさわしい教養知の提示とでもいいでしょうか。現代人の感性や時代の状況に照らして取捨選択できるカリキュラムづくりです。それは、全方位的コミュニケーションの道具となると思いますね。

でも、その実現のためには、我々自身も変わらなければなりません



日本のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

### 亀山郁夫 (かめやま・いくお)

1949年栃木県生まれ。東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業、同大学大学院外国語学研究所修士課程修了、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。天理大学助教授、1987年同志社大学法学部助教授を経て、1990年東京外国語大学外国語学部助教授、1993年東京外国語大学外国語学部教授、2000年東京外国語大学評議委員、2005年国立大学法人東京外国語大学附属図書館長（～2007年）、2005年国立大学法人東京外国語大学学長特別補佐（～2007年）、2007年国立大学法人東京外国語大学学長就任。著書に『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する（光文社新書）、『ドストエフスキー 謎とちから』（文春新書）など、訳書に『カラマーゾフの兄弟 全5巻』（光文社古典新訳文庫）などがある。





ん。新しい時代の情報と向かいあい、知的にリフレッシュをしなければならぬのです。

**坂内** 教養は、ヨーロッパに遡って議論する必要があります。阿部謹也先生は、「ドイツの中世の村から一步も外に出たことのない農民でも教養はあった。仕事の繰り返しや伝統とときのなかで自分なりに工夫して暮らしてきた」と言われています。教養とは、「成熟した大人として求められる、生きるすべ」ということになるでしょう。

**亀山** 中世の農民は成熟した一人の人間として生を全うしました。おっしゃる通り、教養の基本は、いかに成熟した人間として生きるかにあります。不断に学びつづけていくことが成熟には欠かせません。では、いまの学生が成熟した大人として生きる礎となる学問をやっているのかというと、どうもそうは思えないんですね。人間として急激に進化する20代前半がカギです。ここをどう生きるかがきわめて重要であり、この時期を逃してはいけません。

自分は古い型の人間ですから、教養というとゲーテなどと口走ってしまいます。ポスト構造主義の知性も1980年代には教養になりかけました。しかし、それが急速にしぼんでしまいました。自分たちが今立っている地球そのものが危うい、人類はとうに折り返し点を過ぎた、それが現代人に共通する理解です。人類が往路を走っていたころの教養ではだめなのです。ところが、日本では右上がりの幻想から今もって離れられていません。



戦後と時代が変わっています。しかし、ロシア人は政治・経済体制が変わっても教育観、社会観、人間観などはほとんど変わりませんね。

**亀山** 教養は伝統ですね。

**坂内** どちらがいいのかわかりませんが、日本人の柔軟性を伝統と融合させて、

## 教養の新たな形を求め 専門と教養の関係の再構築へ

**坂内** 教養については、どうしても神学論争になりがちです。古いヨーロッパの大学形成史から知識人の必要条件を見ることも必要です。しかし、リベラルアーツとは、奴隷を使っていた自由人たるローマ人の趣味・技のことでした。それが中世西欧に大学へ入ってきたわけです。

中身は抽象的かもしれませんが、教養とは一つの形です。国や社会、民族の形によって違ってきます。同じリベラルアーツはありえません。日本人でも、教養、あるいは社会規範の形も戦前、占領下、

教養の一つの形をつくっていく必要があるでしょう。ロシアやヨーロッパばかりでなく、アメリカでも教養の形はキチンと作られています。

各分野で実力を発揮している本学先輩たちが、「ゼミで専門書を読まされたがよくわからず、社会に出てもあまり意味がなかった。結局は教養に戻っていた。“余分”や“無駄”と思えることが大切」と言うのをよく聞きます。

**亀山** そういう意味では大学の教育というのは、もう教養だけでいいのではないかと感じてしまいます。私自身、授業で印象に残っているのは雑談だけです。大学の教員としての30数年を振り返っても、私が大学に残しえた専門の資産はゼロ？ということになりかねません。

で、私は最近こんなふうを考えるんです。学生各自が選びとる専



### 坂内徳明 (ばんない・とくあき)

1973年東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業（文学士）、1976年早稲田大学大学院文学研究科修士課程（露文学）修了（文学修士）、1979年一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学、1995年社会学博士（一橋大学大学院社会学研究科）。1996年～一橋大学大学院言語社会研究科教授、2001年～2002年一橋大学評議員、2002年～2004年一橋大学大学院言語社会研究科長、2006年12月～2008年10月一橋大学副学長。著書に『ロシア文化の基層』（日本エディタースクール出版部）、『ルボークーロシアの民衆版画』（東洋書店）など、訳書に『マザー・ロシアーロシア文化と女性神話』（青土社）がある。

門を縦軸とすると、教養は横軸にあたります。これを別の視点から眺めてみます。

民俗学者の折口信夫は、類化性能と別化性能という区分をしています。類化性能とは共通点を探す思考であり、別化性能とは違いを探す思考です。私が強調したいのは、前者すなわち類化性能の涵養ということです。

思うに主として大学で学ぶ人文的な教養とは類化性能を伸ばすことにあります。専門は批判的な眼で物事を分析するわけですから、おのずから別化性能を育むことになります。したがって、教養というのは、時として批判的な思考が行きすぎないようにうまくブレーキをかけ、学そのものに対する根本のシンパシーを持続させるためにあるといえます。

## モラトリアムは成熟の条件、 悠長な時間を大切にしたい

**坂内** 社会と時代の環境がそうだから、理系が一つのモデルとなるのはしかたがないのかもしれませんが、グローバルCOEも理工系が中心です。理系と同じレベルに乗れなくとも、資金的にきつくとも、やせ我慢してやっていますが、大学全体がそういうペースにはまってははいけませんね。

**亀山** 人文学の研究にはお金はいりません。時間さえあればいい。テキストをキチンと読む静かな時間が確保できればいい。もっとも、心理学、文化人類学などにはフィールドワークがありますが……。しかし総じて、ある一定のゆるやかな時間が不可欠であり、自分の人生と対決する覚悟でテキストと向かい合わなくてははいけません。これが人間的な成熟の酵母となります。

**坂内** 東大駒場に教養課程をつくったのは、専門の勉強に入るのを「遅らせるため」だったというのを讀んだことがあります。動きが激しく忙しい現代で、基礎スキルの修練の時間をどのように保障するかはきわめて難しい問題ですが、だからこそかえって必要なのでしょう。

**亀山** モラトリアムは成熟の条件です。それだけの時間が教育の場に配分されていないのですから、文学をやっている私は、生きた心地がしません。

**坂内** 今の学生は、入学後直ちにサークルやアルバイトを中心に本格始動して時間的余裕がないのが実情です。

## 過敏な末梢神経的進化をしている 近頃の学生たちの感性

**坂内** 『カラマーゾフの兄弟』は読まれているかもしれませんが、最

近の学生は一般的には活字離れが進んでいるといわれています。その一方で、携帯電話をはじめ新しい通信手段やメディアを持っています。コミュニケーション手段が多様化しているわけで、一概に活字離れをしているとは思われません。音感が発達し、過敏に反応します。我々の大学生時代より確実に感性は進化しているのかもしれない。

これからの日本を背負っていく学生たちに大学が何を提供できるのか。学長として、どういう舵取りをしようかとされているのでしょうか。

**亀山** 若い人の感性が進化しているというのは、正しいと思います。

さまざまなコミュニケーション手段の進化に伴って、末梢神経的ともいうべき質的な進化をとげています。私はそうした過敏さに重きを置いていません。反応重視のコミュニケーションでは、他者の感情など奥深い



ところまで受け止めることができないからです。全体の文脈を読み取って反応するのではなく、1行読んで、1行で反応する。そんな過敏さを取り除いて他者を理解できるおおらかな学生を育てたいですね。おおらかさは優しさにつながりますから。こうしたコミュニケーションの根本対応ができるような学生を育てたいものです。

**坂内** コミュニケーションはいかに他者を理解するかにあります。人類学者のフレーザーのいう「類感」が見直されるべきでしょう。未開の人間にヨーロッパ人はどのようにして「共感」できるのか、というものです。このフレーザーの発想はアダム・スミスに通じるものです。ところで、先生のコミュニケーションに対する考え方は、学長をなさっている現在の東京外国語大学のあり方とどのように関わっているのですか。

**亀山** 東京外国語大学は、外国語の修得を最大の前提として国際的な幅広い教養を身につけることを目標としています。一橋大学は四つの学部を持って個性のある人材を育てていますが、東京外語大は単一の学部しかありません。かつてはディシプリン志向の学生が多かったのですが、いまはすぐれた語学力をもちながらも、自分の本来の関心がどこにあるのか、きちんと把握できていないあいまいな学生集団になりつつあるような気がしてなりません。



さらには、コミュニケーションを末梢神経的に反応することと考  
えている学生が増えているという不安もあります。もう少し、世界  
の奥行きを見つめられるようになってもらいたいですね。外国語つ  
まり他者の言語を理解しようという徹底した修練を経ることによっ  
て、はじめて人間と社会の総体が学べるようになるのですから。言  
語を取りまわっている、文化、社会をしっかりと勉強していくことが重  
要なのであって、言葉好きであることそれ自体に大して意味はあり  
ません。言葉に使われてはいけない、言葉を使う人間の主体性を獲  
得することが、外国語を学ぶ最大の意味だと思います。

**坂内** グローバル化している時代ですから、母語以外の言語を知ら  
なければ、より正しく的確な情報は得られないのは当然ですね。

## 英語 + $\alpha\alpha$ のマルチリンガルが これからの国際人の条件

**亀山** なぜ英語の読み書きができて、聞き取りができない人が多  
いのでしょうか。それは、ディシプリン志向で、「話す」「聞く」を  
蔑視してきたからでしょう。そういう姿勢が、現在になってリベン  
ジされているのです。時代はたしかに表層的なコミュニケーション  
能力を求めています。少なくともその点においては、若い人の可能  
性は高くなってきています。その可能性を大学教育でどこへ導ける  
かが問題なんですね。

**坂内** 私の中学時代の英語はソノシートで勉強しました。いまでは、  
ヒアリングを学ぶ環境は各段に進歩しています。それでも、きちん  
とした文法学習なしには上達はできませんし、インテリとしての外  
国語力は獲得できません。

**亀山** グローバルスタンダードとしての英語は重要です。そして、  
これからはいたるところで中国語が必要になるでしょうから、セカ  
ンド・グローバルスタンダードとしての中国語を身につけさせたい

ですね。英語 + 中国語 +  $\alpha$  の時代がやってきたのです。また、世界  
のエネルギー国として存在感を増してきたロシア語や国内のグロー  
バル化やブラジルの発展を考えるとポルトガル語なども注目です。  
いずれにしても母語である日本語と合わせて4か国語を使いこなせ  
るマルチリンガルが求められる時代が来るでしょう。我田引水を恐  
れずに言えば、さらに文学ができることが国際人たる最高の切り札  
になると思いますよ。

## 人文系ならではの個性を持った 人材を育成していきたい

**亀山** 国立大学は、文部科学省の路線に軸足を置いてはいても、同  
時に個性ある大学として旗幟を鮮明にしていかなければなりません。  
私自身は文学者として狭い世界の中で暮らしてきました。ですから  
私が文学の大切さを言い続けることは大学のイメージを固定化する  
危険性があります。しかし、語学、文学だけを勉強する大学ではな  
いということを断固アピールしていきたいと思います。

国際的、総合的な知を学ぶ場としての外国語学部です。ただし私  
自身は、一文学者として、日本や世界をにらみながら発言していく  
つもりです。

**坂内** オープンキャンパスで感じるの、一橋大学のありようが高  
校生にはわかりづらいということ。大学側としては、偏差値  
云々ではなく、「こういう高校生を入学させたい」とハッキリ示すべ  
きです。そうしていかないと、生き残っていきません。

**亀山** 私には、逆に、日本における社会科学の牙城としての一  
橋大学のポリシーがきわめて鮮明に見えて羨望を禁じえません。で  
は、東京外語大はどうか？ 世界の中でフットワークよく動く現場で  
役立つ人材を輩出しています。一方、一橋大学のイメージは、社会  
の基幹をつくり上げる人材を育てている。でも、ディシプリンに勝

っている人材が、すぐれた外国語能力を身  
につけ、しかもそこにフットワークの軽さ  
が加わったら、怖いものなしですよ。

**坂内** 「よその芝生」は良く見えるもので  
す。一橋大学の「社会科学の総合大学」と  
いう看板も時代と社会の要請の中で、その  
中身を不断に検証し、自らの強みと持ち味  
を伸ばし、弱点を補強していかなければな  
りません。そのためにこそ、他大学との本  
来的な意味での競争は必要と考えます。

これからのご活躍をお祈りいたします。  
本日はどうもありがとうございました。

